

「世界のメディア・リテラシー教育」 森本洋介

本発表では「世界のメディア・リテラシー教育」と題して、主に1. 世界のメディア・リテラシー教育の状況、2. 世界のメディア・リテラシーに関する研究の状況、という2つのことについて報告を行いました。

1. 世界のメディア・リテラシー教育の状況

以下の国や地域、国際機関を対象として、メディア・リテラシー教育がどのような考え方に基づいて、そのように展開されているのかを考察しました。

国際機関	北中米	ヨーロッパ	アジア・ユーラシア	中東・ロシア・アフリカ
ユネスコ	アメリカ合衆国	フィンランド	日本	イスラエル
	メキシコ	スロベニア	韓国	ロシア
		フランス	オーストラリア	トルコ
			中国	南アフリカ共和国
			タイ	ナイジェリア

結果として、

- ・ 諸外国においても「メディア・リテラシー」の概念は多様であり、その国や地域での文脈のなかで歴史的、社会的、文化的、政治的な意味を持って概念形成がなされている。
- ・ メディア・リテラシー教育後発組（タイやナイジェリアなど）は国際機関（主にユネスコ）の影響を受けており、多義的な意味を有する概念においては、与える影響の差はあれ、国際機関の与えるインパクトは否定できない。
- ・ 取り組みは不変ではない（何かをきっかけとして変化する可能性もある）という考察を得ることができました。

2. 世界のメディア・リテラシーに関する研究の状況

研究分野でメディア・リテラシー教育がどのように取り扱われる傾向にあるのかを、学術誌に掲載された諸外国の研究成果を基に考察しました。諸外国におけるメディア・リテラシー教育の研究動向として（1）メディア・リテラシー教育の研究動向や、概念の再構成に関する研究、（2）教材研究、（3）能力測定に関する研究、（4）教員養成に関する研究、の4つに大別しました。

（1）メディア・リテラシー教育の研究動向、においては、ルネ・ホップ

スのメディア・リテラシーの定義を参考に、アメリカの文脈において UDL と結びつけながら先行研究の検討を中心に議論している研究や、メディア・リテラシー教育実践において SNS の教育利用に関する研究が年々増加していることを示した研究、アルゴリズムに主導されたメディアについて理解する必要性が原因となって、教育者にメディア・リテラシー教育とコンピュータ教育の間のつながりの見直しを求めていることを示した研究、などメディア・リテラシーの概念を問い直すような研究が進められていることがわかりました。

(2) 教材研究では、テクノロジーの知識、教育学の知識、教科内容の知識の3つのカテゴリーを重ね合わせることを意識して授業づくりをすることが重要であることを実証的に扱った研究、32人の第11学年の生徒を対象に、ツイッターを利用してクリティカルリテラシーを獲得させる授業を行った研究、などデジタルテクノロジーをメディア・リテラシー教育としてどのように作りだしていくのかを考察した研究などがありました。

(3) 能力測定に関する研究では、小学生向けのメディア・リテラシーの能力を測定しようとした台湾の研究、都市部の学校で教える教員のデジタルリテラシーの授業におけるテキストや教材の選定と、授業への導入について向上していった様子を報告した研究、総合大学の学部生を対象に、信頼性と妥当性のあるオンラインのメディア・リテラシー能力を評価する尺度をデジタル・オンラインメディア・リテラシー・アセスメント (DOMLA) と呼び、学部生の DOML レベルを量的データを基に特定した研究、など多様な立場の人間に対してメディア・リテラシーの能力の獲得度合いを評価したり、評価する方法を提案したりする研究がありました。また、能力測定ということに関していえば、メディア・リテラシーの能力それ自体をどのように具体化するのかということも興味深い内容です。

(4) 教員養成に関する研究では、近年のメディア・リテラシー研究が高等教育を対象にした内容が多いとのことで、それとも重なっています。メディア・リテラシー教育ができるようになるためには、授業をする教師にもメディア・リテラシーをある程度身につけていることが求められます。最近の若者はデジタル・ネイティブであるという思い込みがあると考えられますが、実際に教員を目指す大学生相手にメディア・リテラシー教育の授業をつくらせてみると、「被験者の学生は自分自身のメディア・メッセージに対する解釈や情報発信を教えることについてはある程度自信があるが、その能力を不特定多数の人間との議論に用いることにはあまり自信がない。また、ターゲット・オーディエンスを特定するための技術的なこと (cookies など) の理解については自信がないようである」といったことが判明したそうです。アメリカの一部の大学生に対して行われた研究ではありますが、日本の教員養成課程にいる学生にもある程度当てはまるのではないかと、教員養成課程を担当している私は感じているところです。

以上のことから

- AI の発展やフェイクニュースにより、メディア・リテラシーの概念自体のパラダイムシフトが起きつつあるのではないか。また UD などの他の分野の概念と ML を結びつけようとする動きもある。
- 教材開発の動きにも SNS やフェイクニュースが影響を与えており、それらを用いた授業の効果研究が各地で進んでいる。

- 効果研究という点で、能力測定の研究も質的・量的ともに事例研究が進んでいる。
- 特にアメリカでは高等教育（教員養成課程）における ML の導入実践が注目されている。

というまとめをしましたが、AI との関連でどのようにパラダイムシフトが起きているのか、起きていないのか、少なくともアメリカのメディア・リテラシー教育学会（NAMLE）の議論からは聞いたことがない、というご指摘もありました。「パラダイムシフト」は言い過ぎかもしれませんが、メディア・リテラシーの概念がテクノロジーの発展とともに変化する可能性やより広範囲な意味に捉えようとする動き、多様な研究者による多様な定義の登場という動きは考えられると思われます。